演題 A－4

母子看護学実習Ⅰにおける学生の学びの分析

キーワード：母性看護学実習、学び、テキストマイニング、アクティブ・ラーニング

○森田千穂[1)]、久保田美雪[1)]、池田かよ子[1)]、小林正子[1)]、小林美代子[1)]、渡邊典子[1)]
新潟青陵大学[1)]

Ⅰ 目的

P大学では、3年生が領域別看護学実習を行なっている。母子看護学実習Ⅰ（母性）では、病医院の産科病棟において、産褥期の女性と新生児を受け持ち、健康の保持増進と正常からの逸脱予防の看護を学習している。例年、母性看護の特徴を捉えられない学生がいることが担当教員の中で課題となっていた。そこで、今回、アクティブ・ラーニングを取り入れたカンファレンスを導入し、学生が母性看護の特徴をどのように捉えているか検討したので報告する。

Ⅱ 方法

1.対象

2015年4月～8月に母子看護学実習Ⅰを履修した83名。

2.方法

母子看護学実習Ⅰの最終日に学内においてアクティブ・ラーニングを取り入れたカンファレンスを実施し、1枚の用紙にまとめた。そこで学生が自由記述した内容をテキストマイニングにより分析した。分析は、KH Coder を用いて頻出語を抽出し、それぞれの言葉の関係性を明らかにするために共起ネットワーク分析を行った。なお、分析の精度を上げるために一部名詞句の表現を統一した。また、抽出された言葉が文脈のなかでどのように使用されていたかを適宜複数の教員で確認し、妥当性を確保した。

3.倫理的配慮

学生には、学会発表する可能性があること、個人としての評価ではなく全体の学びを分析・検証することを説明した。記述内容については、公表を希望しない場合は後日教員に申し出るよう説明し、自由意志を保障した。

Ⅲ 結果

1.頻出語

抽出語数（助詞や助動詞等を除いた分析に使用する語数）は1,878語であり、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）は601語であった。頻出語（上位10語）を抽出した結果を表1に示す。

表1．頻出語のリスト

抽出語	出現回数		抽出語	出現回数
母親	111		大切	22
赤ちゃん	68		サポート	21
退院	27		看護	21
家族	24		声掛け	21
育児	23		母子一体	21

2.共起ネットワーク分析

共起ネットワーク分析（サブグラフ検出）では、7個のグループが形成された。抽出語のまとまりから、①「母子相互作用」、②「継続ケア」、③「育児支援・エモーショナルサポート」、④「個別性」、⑤「アセスメント」、⑥「母子一体の看護」、⑦「母乳栄養」と解釈した。

強い共起関係にあるものとして、①「母子相互作用」では、「母親」「赤ちゃん」、「上の子」「影響」「考える」「初産婦」「経産婦」「関係」、②「継続ケア」では、「妊娠」「分娩」「産褥」、「継続」「支援」「妊娠期」「関わり」、「気持ち」「寄り添う」、③「育児支援・エモーショナルサポート」では、「育児」「不安」、「自信」「声掛け」「持つ」、④「個別性」では、「人」と「それぞれ」、⑤「アセスメント」では、「情報」「判断」、「正常」「経過」、「自分」「時間」、「一緒」「成長」、⑥「母子一体の看護」では、「母子一体」と「看護」、⑦「母乳栄養」では、特に強い共起関係はなかった。

Ⅳ 考察

頻出語による分析と共起ネットワーク分析の結果から実習の学びについて考察する。

学生は「母親」と「赤ちゃん」を中心とした「家族」に対して、「母子一体」の視点でみた「看護」の重要性を学んでいた。また、外来・病棟実習を通して「妊娠」「分娩」「産褥」各期の関わりから、妊産褥婦という変化を遂げる母親の「気持ち」に「寄り添う」「継続」した「支援」の重要性を学んでいた。そして、産褥期の母子を継続して受け持つという経験から、いかに母親が「育児」に対する「不安」を抱えているかを実感し、母親のそばで心身ともに優しく勇気づける現場の助産師たちをモデルに母親が「自信」を「持つ」ことができる「声掛け」について学んだと考える。さらに、母子双方の命を預かる周産期の現場における、「正常」な「経過」を「判断」し行動する力としてのアセスメント能力の重要性を学んでいた。

Ⅴ 結論

以上より、学生は実習という看護実践を通して母性看護の特徴を捉えることができていた。アクティブ・ラーニングを取り入れたカンファレンスにより、学生が自分の思いや考えを言語化し、可視化したことで、学びの共有が出来たと考える。

文献

樋口耕一．社会調査のための計量テキスト分析．ナカニシヤ出版．2014